

樹医からのアドバイス (Vol.24)

～テッポウムシによる庭園樹などへの加害～

出雲市樹医センター

樹医 高橋 義則

カミキリムシの幼虫は、幹や枝の中を食害することから、通称「テッポウムシ」と呼ばれています。テッポウムシは各種広葉樹など1～2年間にわたり、幹の中をトンネル状に食害し、穴から木くずや虫糞を排出します。テッポウムシの被害を受けると、樹木の樹勢が衰えたり枯れたりします。

【被害にあいやすい樹種】

ポプラ、ヤナギ、カエデ、プラタナス、エゴノキ、イチジク、リンゴ、ナシ、ミカン、ドウダンツツジなど多種あります。

【テッポウムシの生態】

成虫は体長25mm～35mm程度で長い触角があります。6月頃、カミキリムシの成虫は幹の表面にかみ傷をつけ産卵します。ふ化した幼虫（テッポウムシ）は8～11月に樹木が地面に接する部分付近の樹皮下を食べながら成長します。その後、樹木の中で冬を越してさなぎになり、5～6月頃羽化して樹木から脱出します。

【防除方法】

- ①成虫は見つけ次第捕獲する。
- ②産卵防止のため、幹にトラサイドなど樹幹塗布剤を樹木が地面に接する部分から20cm～30cm位の高さまで塗布しておく。
- ③食入した幼虫を駆除するには、木くずの排出孔から園芸用スプレー殺虫剤やME P（スミチオン）乳剤の50～80倍を注入する。



地面に接する部分からトンネル状に食害



テッポウムシ（50 mm）と食害されたモミジ